

『 黒い波 』

東日本大震災支援に参加して

ほうらい今市事業所
宇都宮 精一

東日本大震災

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分頃、三陸沖を震源とする M9.0 の巨大地震が発生した。この地震により、宮城県栗原市で震度 7、福島県、岩手県、茨城県等で震度 6 強など、広い範囲で強い揺れを観測した。本震及び余震による建物倒壊、地すべり、液状化現象、地盤沈下等の直接的被害の他に、太平洋側を中心とした高い津波が発生した。それにより東北から関東地方の太平洋側で大きな津波被害をもたらした。さらに、福島第一原子力発電所事故に伴う放射能漏れや大規模停電などが発生し、東北地方を中心とした甚大な一次被害のみならず日本全国及び世界に経済的二次災害をももたらせた。

都道府県	死者(名)	行方不明者(名)	合計(名)
北海道	1	0	1
青森	3	1	4
岩手	4,271	3,469	7,740
宮城	8,768	6,612	15,380
山形	2	0	2
福島	1,472	1,239	2,711
茨城	23	1	24
栃木	4	0	4
群馬	1	0	1
千葉	19	2	21
東京	7	0	7
神奈川	4	0	4
／合計(名)	14,575	11,324	25,899

都道府県	死者(名)	行方不明(名)	人口比(%)
岩手県(市町村)			
陸前高田	1,426	783	9.48
大船渡	302	156	1
釜石	792	559	3
大木迫	726	978	11.15
山田	556	378	5
宮古	408	534	2
岩泉	7	0	0
田野畑	14	23	1
野田	38	0	1
久慈	2	2	0
宮城県(市町村)			
仙台	949	210	0
石巻	2,879	2,770	4
気仙沼	876	1,084	3
名取	892	231	2
東松島	1,020	740	4
山元	657	99	5
女川	450	757	12
南三陸	536	657	1

平成 23 年 5 月 5 日現在

津波被害の歴史

・貞観地震(じょうがんじしん)

869 年 7 月 9 日陸奥国東方の海底に地震発生(M8.3 以上が推測される)。現在の東北地方東の三陸沖で、発生当事の死者 1000 人以上津波の被害甚大。

・明治三陸沖(めいじさんりくじしん)

1896 年(明治 29 年) 6 月 15 日 19 時 32 分 30 秒に発生。震源地現在の岩手県釜石市付近 M8.2~8.5 と推定される。陸地では震度 2~3 程度、地震による直接的な被害は無く誰も気に掛けるような地震ではなかった。しかし大津波が発生、甚大な被害が発生した。地震発生 30 分後の 20 時 02 分、津波第一波が到来。範囲は北海道~宮城県に渡る範囲襟裳岬 4m、青森県八戸 3m、宮城県女川 3.1m 岩手県宮古市 18.9m、山田町 10.5m 釜石市 8.2m 気仙沼市 22.4m 綾里湾内では 38.2m の遡上高を記録した。人的被害: 死者 21,915 名(北海道 6 名 青森県 343 名 岩手県 18,158 名 宮城県 3,452 名 行方不明者 44 名) 物的被害: 流失家屋 9,878 戸、全壊家屋 1,844 戸、流失船舶 6,930 隻。

・昭和三陸地震(しょうわさんりくじしん)

1933 年(昭和 8 年) 3 月 3 日午前 2 時 30 分 48 秒岩手県釜石市沖 200k を震源とする M8.1~8.4 三

陸各地は震度 5 を記録したが明治三陸地震同様地震による被害は発生しなかった。しかし、津波の被害は甚大で最大遡上（現在・大船渡市三陸町）28.7m、死者 1,522 名、行方不明者 1,542 名 流失家屋 7,009 戸、全壊家屋 4885 戸、浸水家屋 4147 戸、焼失家屋 294 戸、特に被害が大きかった（現・宮古市の一部）人口の 42%・家屋の 98%が流失した。1931 年（昭和 6 年）東北地方冷害、1933 年（昭和 8 年）の大津波 1934 年（昭和 9 年）東北地方凶作と続きこの地域は農村・魚村を問わず疲弊する。

・ チリ地震（ちりじしん）

1960 年（昭和 35 年）5 月 22 日 15 時 11 分震源地チリ中部の都市バルデチンビア近海で発生 M8.5～9.5M7 クラスが何度も発生し首都サンチゴを始め全土が壊滅の状態となる。地震による直接被害は死者 1743 名、我国には、地震発生から 22 時間半後の 5 月 24 日未明最大 6m の津波が三陸海岸を襲い 142 名が死亡。岩手県大船渡市 53 名、宮城県志津川町（現在南三陸町）41 名、北海道浜中町 11 名死亡。

三陸地方を襲った過去の地震

1611 年（慶長 16 年）12 月 2 日 14 時頃、現在岩手県沖、M8.1 死者 1783 名

1677 年（延宝 5 年）11 月 4 日現在房総沖 M8.0 死者多数

1978 年（昭和 53 年）6 月 12 日 17 時 44 分 M7.4 死者 28 名負傷者約 10,000 人余り 50 万人以上の大都市が初めて経験した都市型地震 1981 年建築基準法改正のきっかけとなり又宮城県では 6 月 12 日を「県民防災の日」と定めている。南三陸町（宮城県本吉郡）北緯 38°40'29" 東経 140°27'01"

平成 17 年 10 月 1 日 志津川町・歌津町対等合併により発足。宮城県の北東部に位置し志津川湾・伊里前湾に面したリアス式海岸南三陸金華山公定公園に入る。昭和初期まで養蚕業が盛んだったが現在はほとんど行われていない。現在ではカキ、ホタテ、ホヤ、キンザケ、ワカメなどの養殖及び農漁村滞在・体験型の観光も盛んだった。町長：佐藤仁 2006 年 11 月 6 日から 2 期目、庁舎で津波にのまれるも奇跡的に生還陣頭指揮を取る）町内避難場所 37 ケ所 利用者人数 8399 人 災害時総人口 1,7431 人 死亡・行方不明者数 1,193 人町民の 51.72%の方が避難所生活を余儀なくされている。町内の中心部、町役場、警察署、郵便局、病院、銀行、スーパー、銀行、水産加工工場等、行政及び産業の拠点が津波により壊滅的被害を受けている。又気仙沼線は至る所で架橋・線路が流れ復旧、再生は困難を極める。震災から 2 ヶ月が経とうとしているが電気、水道、ガス等のライフラインの回復には程遠い状況にある。

福岡被災地前進支援に参加して

期間：平成 23 年 4 月 29 日～5 月 4 日 参加者：（福岡）植木貴文、坂本透、花田彦太、松隈尚、大神弘太朗、宇都宮精一（東京）赤司郁子、長谷川礼奈

2011 年 3 月 11 日東日本大震災が発生した同時刻に、私は岩手県盛岡市出身の方と面談中だった。比較的海岸に近い家だったこともあり、外は急に慌しく消防車やパトカーが津波注意をふれ廻り、サイレンが鳴り響いていた。テレビも一斉に災害放送に切り替わった。津波が、人も家も車も仕事場も生活の場の全てを飲み込んで行く光景が写し出された。北は北海道から、南は神奈川県まで 1 道 1 都 10 県に跨る被害状況が引切り無しに流れた。私はとんでもないことが起きているのだが全容が掴めずにいた。一度この目で実態を見てみたいと言う想いが強くなり、私は全国老人保健施設協会や県の社会福祉協議

会等の団体から3月末から被災地派遣可能な職員を募集していたので早速に応募した。しかし全国老人保健施設協会や県の社会福祉協議会等の団体からは一ヶ月経っても何の連絡もなかった。募集団体に問い合わせると「上の方から指示が無い」「検討中」と返答があるのみだった。人任せではあてにならないので自分で岩手県（盛岡社協、花巻、一関、宮城県仙台、石巻）福島県（相馬、群山、茨城県、北茨城）の各社会福祉協議会の募集に応募し問い合わせたが、募集は団体のみで個人は受け付けていないとの返事ばかりが返ってきた。私は、何かの団体に所属して動かないと相手にされないがそんな当ては全く無いと悶々とした日々が続いた。そのような中、仙台の社協から1本の電話があった。どうせ断りの電話と思い期待もせず話したが、個人のボランティアは受け付けていないが何とか力になりたいとの話だった。二日後、仙台から電話があり福岡被災地前進支援を紹介され、ネットにて調べるとまだ開設して間もない組織だった。私は不安もあったが迷わずそこに連絡を入れた。電話の相手は、想像していたより若い声だったが、しっかりとした考え方を持っている青年のようにも思えた。50歳を過ぎた伊能忠敬が30歳前後の高橋芳時に測量・天文学を学び後世に残る仕事を行うことが出来た。人との縁が次の第一歩となればと彼の話に乗った。家族には5日程南三陸町に行くことNPOの住所と電話番号とを渡すだけで多くのことは話さなかった。又、ボランティア保険も補償の高い天災B型に入り領収書を渡し安心させ職場の上司・同僚に話をしたら快く了解してくれた。満足な準備も出来ないままに出発にこぎつけることができた。あとは自分の体力を信じて若者達の足を引っ張る事の無いようにしなくてはならないと肝に命じた。4月29日は震災から49日目、松尾芭蕉が奥の細道の旅に出た日にも重なりただの偶然とも思えず改めて緊張感が高まる夜半、集合場所の博多駅前を目指し家を出ると徐々に緊張感が高まってきた。30日午前0時自己紹介と集合のインターを確認し車三台に分乗し出発、宮島インターにて代表のメンバーより手作りの朝食が振舞われた。昼食を浜名湖インターで摂り、東京江東区の小学校を目指した。教師・父兄が集めた支援物資を積み込む予定だった。都内に入る前頃から渋滞に巻きこまれ、さらに都市高速に入るのに災害支援物資運搬許可書を提示するが職員に周知徹底していないのか通過までに時間がかかった。イライラの中、車中からの東京は予想以上に暗い、華美なネオンはすべて消えている。これが首都と東京かと思わせるほど静かな街、暗い中に電気のほとんど付いていない高いビルはいようにも感じた。「節電」を理解するまで時間が掛かったがだんだん被災地が近くなりつつある事が実感して来た。江東区の小学校で支援物資の積み込みと夕食・仮眠後新宿に移動しさらに代表の知人宅での物資の積み込み、ここで2t車が満載となった。東京からの合流組を加え目的地南三陸町を目指し東北道に入るが節電の為かこの道も暗い。福島を過ぎた頃から時折、段差注意の看板を見るようになり当然段差にはまり車が揺れ緊張感が高まる車の中、交代で仮眠しながら走行を続けるのだがうとうとしていると突然のバウンドで目が覚めとてもおちおちとは寝てはいられなかった。博多を出て30時間、ようやく仙台に到着。盛りを過ぎたとはいえ桜前線にも追い付いた。仙台市内に入っても地震による被害は確認出来なかった。仙台市内から日本三景の宮島に寄ったが思ったほどの津波被害は見当たらない。本当に被災地が近いのかと疑いたくなる程、整然としていた。石巻に入っても道路が内陸部を主要幹線が通っているので津波の被害は見つからなかった。並そうする気仙沼線も特に問題ないように思えたが市街地を外れた頃から段々と様子が変わって来た。中学のグラウンドや野球場等に自衛隊の野営キャンプ地が見られるようになり行き交う車も自衛隊の車輛が多くなった。震災直後から創設以来、初めての即応予備自衛官及び予備自衛官の招集等で災害派遣としては過去最大級の10万人体制で広範囲の被災地

を支援しているのでどんな小さな町に入っても野営キャンプ地を見かけるようになった。南三陸町に入ることから通常の風景が一変し始める。山間に二両編成の電車が止まっていた。復興したのは東北新幹線だけではなくローカル線も復旧したのかと思ひ込むように整然と止まっているがしかしよく考えてみるとこんな辺りな山間に電車が止まっていること自体おかしいと気付いた。止めているのではなく放置されているのだ。町堺の山道を下り始めるとさらに考えられない光景が見られるようになった。山間の木々にホタテやワカメの養殖に使うかごや網などが引っかかり、海より 2~3Kmは山の中で小船が道路脇に放置され谷間の河川に車が沈んでいた。船が山に、車が谷間の水の中、海岸部が見渡せる所まで降りてくると一気に緊張感が高まった。まさにテレビ画面の中の光景が広がった。遮る物が何も無く海までの視界が広がりその中に建物など一切存在しなかった。たまにむきだしの鉄骨や破壊され尽くしたコンクリート構造物の一部のみが残っているだけ。橋も、鉄橋も、10m近くあったと言う防波堤の残骸が転がっているだけ人間が英知と長い時間を掛け築いて来た物など一瞬の内にのみ込んで行ったのだろう。海岸部から 2~3Kmの幅はほぼ壊滅状態、自衛隊が架けた仮橋や地震の地殻変動で水没した箇所を避けて作られた仮設道路を通ると恐怖感が更に高まる(とんでも無い所に来た)と思った。身体は慣れない長距離運転と睡眠不足で疲れ切っているが見慣れない光景に興奮が取れないままに活動拠点のベエスキャンプ作りに取り掛かる設営場所は海岸から 3km程登った所に設置した。設営後、食事の準備をしていると近所の方が通りかかり津波は設営場の 100m程手前まで遡上して来たとの事で小さな川沿いにがれきが散乱し、一階部分が壊され柱だけで二階部分を支えている家もすぐ側にあり遺体も 2 体上がったと聞かされ背中がぞっとした。震災後 50 日目だがこの付近はいまだに電気が復旧していない。真っ暗闇になる前に食事の片付け等を終え明日の配達地等の打ち合わせを行ない早めに消灯となったが昼間見た光景と夕方の話と更に暗くなってから気づいたことだが異常にパトカーの巡回が多いことだった。それに各府県の県警が巡回していることにも気づきやはりここは非常事態の被災地だと言う事を実感させられた。長距離運転・睡眠不足であるが興奮が冷め遣らずなかなか寝付けなかった。夜間も引切り無しに巡回するパトカーの赤色灯が薄いテントからよく解った。おまけに深夜からは地震と寒さに悩まされほとんど寝ないままに朝を迎えた。この二つは若い時、北海道で何年間か過ごした経験もあり他の人には負けないと思っていたが長い間西南暖地で暮らすと身体は鈍らになっていた。本日より避難場所に物資の運搬となるが当初考えていたよりは厳しい物となると思うと更に緊張感が走り朝食も咽喉を通らない。水分だけでもと思い自宅から持ってきた梅シソを小川の水で薄めて持って回った。力仕事だけは皆に負けまいと動くのだがすぐに息切れ、長靴も被災地用に鉄針、厚底補強長靴は思った程以上に重くこちらの方もさび付いていることを認識したが引き返すわけにも逃げ出す分けにも行かないので老体に鞭打ち皆の後から付いて行き足手まといだけにはならなかったようだ。博多・東京から積み込んだ荷物と共に比較的小規模な避難場所、石浜、馬場中山、石泉、寄木と廻った。各県から送られてくる物資の集積書には多くの食品、衣類等が山積みになっているが役場職員の多くが亡くなり行政統治能力の低下と家から人から一切を無くした方と、住宅が半壊もしくは残った場合とでは支援物資の配給にも差が生まれてくると聞く例え住宅が残ろうと電気もこない、水道も使えない事には変わりなく食品や生活用品にも同じように不自由差を感じているのだが物資の公平な分配が行われているとは思えない。行政も要約自分達の管理能力にきづいた様で 5 月半ばから(クロネコヤマト)に業務委託し物資の管理及び各避難所への配送業を任せるとの事でしたので幾らかは公平性が取り戻されると思う。新聞

やテレビが報道するような礼節を守れる人達が少なくなっていることは確かなようで夜間も引切り無しにパトカーの巡回が続くことがそれを証明していた。そんな中でも子供達の笑顔には救われた。避難所で暮らす子供から聞いた「津波は海が真っ黒くなりいきなり溢れ出す」と言う言葉が頭に残った。物資配送を終えキャンプ地に引き上げる途中に小高い丘に立つ特別養護老人ホーム慈恵園を訪問した。新聞やテレビ報道で見聞きしていたが実際に訪れると言葉が出なかった。50床の入所者と4床の短期入所及びデイサービス30人定員の施設が津波を受け入居者のほとんどの方と短期入所者2名とデイ利用者2名が亡くなった施設。海からは距離にして約1.5km、海拔16mの所にある施設が津波による冠水により多くの利用者が避難できないままベット上で亡くなったと聞いた。海まで連れ去られなかっただけでも、又、冠水による溺死であり津波に巻き込まれ誰だか判別のつかないように傷つくので傷がなかった事がせめてもの救いと地元の方が話された。訪問者全員で手を合わせた。翌日からは地元出身の歌手、まきのめぐみが同行した。国際興行バスガイドから歌手に転向した経歴を持ち4月半ばにも大規模避難所二箇所でもコンサートを行ったと話されていた。今回は避難所生活を送る実姉母親を訪ねて来たとの事だった。小規模な避難所での支援物資配送後トラックの荷台でのミニコンサートとなり彼女の歌う『帰ってこいよ』は、津波に連れ去られ、未だ行方不明の方々が700人近くいる中、その人達に呼びかけているようで全員の涙を誘った。キャンプ地に帰る途中海岸近くの彼女の実家が有った付近に車を止めると、瓦礫の中を歩き回りながら何か記念になる物でも探してしている様子だった。人前では明るく歌い笑いを取るようにおどけて見せていたが現実には彼女も家を無くした被災者の一人に帰る。こういうギャップが同行した者にはたまらなく切ない。海岸付近では未だ遺体捜索も行われているようで10人程の人達が棒を片手に横一列に進む光景が見られた。瓦礫の片付け車輛が砂埃を巻き上げて走る傍で50日を経っても地道に遺体捜索が平行して行われていた。瓦礫の中には破傷風や東北地方の風土病、つがが虫病注意の手書の看板を見ることがあった。まだまだ長期に瓦礫の山と戦う方々にこれらの病気が発生、蔓延しないように心から祈るばかりだ。災害発生時から不眠不休で復興に取り組んでいる自衛隊隊員の中から二名の死亡者が出ていることは余り報道されてはいない。短期間それも物資輸送と言う形で今回ボランティアに参加させていただいた。ボランティアに対する厳しい批判もあることも確かだ。観光気分、自分探し、やりがい、自己満足などのためだけにやってくる。統制も装備も訓練も無いただのやじ馬は、復興活動の邪魔になるだけで役には立たない。被災者のことは被災者しか解らないとの厳しい意見を聞く事も有った。ただこの連休に全国各地から被災地に入り何らかの活動をした人達が多くいた事も確かなようだ。まだまだ復興は始まったばかり。広範囲に跨る被災地が復興するにはこれからも多くの人々の熱い支援は必要だと思った。職場単位や高校中学の修学旅行を災害ボランティアに当てるのもこれも貴重な体験になるのではないかと、半年や一年では復興や再建は不可能ならば長期の継続的支援が必要だと思われた。私も自分の職場や高校生等前で支援援助を訴えて行きたいと思っている。面識の無い私に参加の機会を与えてくれたNPOの代表、又率先して働く仲間達に出会えた事に感謝したい。